2024（令和６）年７月14日（日曜日）に開催された外国籍県民かながわ会議（第12期・第10回）の議事録は次のとおり。

１　開会

（事務局）

・　会議のルール、録音、傍聴者、欠席者及び配付資料について説明した。

２　全体会議

（柳　晴実 委員長）

・　本日は、かながわ国際政策推進懇話会から、田口香奈恵委員にお越しいただいた。はじめに、全体で田口委員から自己紹介をしていただくとともに、日頃の活動内容や提言案に関する意見等について、お話いただく。
・　その後の部会別協議では、残り３回の会議で提言をまとめられるよう意識しながら、話し合いを行ってほしい。
・　最後の全体会議では、部会別協議の内容を報告いただくとともに、12月のあーすフェスタかながわについても少々話したい。
・　それでは、さっそく田口委員からお話をお願いしたい。

（懇話会・田口委員）

・　簡単に自己紹介する。岐阜県出身だが、2008年に東海大学に赴任することになったときに、神奈川県に引っ越してきた。
・　海外経験としては、ロシアで２年間日本語を教えていたことがある。
・　今の職場は東海大学で、専門は日本語教育である。その中でも外国につながる子どものサポートやキャリア形成に目が向いている。
・　普段は留学生に日本語を教えたり、日本語の先生になりたい人の教員養成もしている。TICC（Tokai International Communication Club）という学生団体と一緒に、アドバイザーもしながら活動を継続している。
・　それとは別に、「はだの子ども支援プロジェクトゆう」というボランティア団体を 2016年に立ち上げた。最初は外国につながる子どもたちの夏休みの宿題を支援するところから始まったが、定期的にサポートしてほしいという声があり、放課後支援をスタートした。ＳＯＳがあればそこに行く形で、秦野から伊勢原、中井と徐々に活動地域が広がっていった。

・　子どもの支援をしていくと、保護者とのつながりも出てくるので、お母さんたちが日本語を学びたいとか、家庭への支援も少しずつ出てきて、就学前の支援や、高校進学する際の支援にまで活動の場が広がってきている。
・　配布したパンフレットの４ページ目に、ゆうの活動内容が載っている。放課後学習支援、教会での日本語教室、学校への同行支援などを行っており、最近はボランティアを養成するような取組も始めている。
・　事前に質問としていただいた「地域密着型の支援体制の構築」に関する事例についてお話する。
・　最初は個人で活動していたが、部屋を借りたり学校に入っていこうとしたときに誰ですかと言われてしまって、活動に壁を感じたため、団体を作った。それでもうまくいかないことがあり、秦野ではもどかしい思いもしてきた。
・　中井町は外国人比率が県内で４番目に高い。そのうちフィリピン人が全体の半分くらい。県西地域で外国にルーツのある子どもの数を聞いてまわっていたが、中井町とは徐々に関係ができており、連携の手応えを感じている。
・　中井町で国際教室を設置すると聞いて、国際教室のボランティアとしてお手伝いが始まった。町民や大学生にも声をかけて、一緒に国際教室に入った。交通費がかかるので、何とかならないか相談したところ、教育委員会から１回500円出していただけることになった。
・　その後、教員研修の講師を務めたりすることで信頼関係ができてきて、2022年に、私たちの団体がインタビューや調査をした内容をまとめた報告書を作成した。日本語教室に参加している外国人の方に声かけをして、現在の状況や感じていること、要望などを聞いてまとめた。
・　行政にもインタビューした。二つの自治体のうち一つが中井町である。子ども支援の担当、戸籍窓口の担当などいろいろな方がインタビューに答えてくれた。そこでも、ゆうと行政との関係性ができた。
・　去年はかながわ国際交流財団の助成金を活用して、中井町でボランティア養成講座を行った。その講座の参加者が、今は一緒に放課後の学習支援や日本語支援を行っている。
・　今後も時間をかけて、始まりは秦野なので、地元の方がそこで活動して、地域に住んでいる方々にも協力してもらえるようになるとよいと思う。
・　オンラインでの日本語教育について、現場で困っていることや、可能性、課題があれば教えてほしいという質問をいただいたので、お答えしたい。

・　コロナ禍に子どものオンラインサポートを実施したが、うまくいった場合とうまくいかなかった場合がある。Wi-Fi や機材はもちろんだが、そういう環境が整っていても、サポートが始まるまでの準備の部分で苦労する。
・　保護者の協力も必要だし、子どもがその気にならないとつながらない。当日になって忘れてしまうこともある。
・　最初はボランティアが家庭まで行って、隣でサポートして、別の方が別の場所からオンラインのやり方を伝えるといったことをしないと、何時に会いましょうというだけでは、特に子どもはつながりにくいと感じている。
・　保護者の協力を得ながら、定期的に何曜日の何時に会いましょうということでやっていかないと、忘れてしまったり、予定があってできないということが続いてフェイドアウトしてしまうこともあった。
・　最初の箱を用意するだけではなくて、本当につながるところまで伴走することが大事だと思った。
・　オンラインだと何をやっているか分かりにくいため、サポートする側が横でつながる、親同士がつながる、取組を共有できる場が必要だと思う。
・　ボランティア同士でも、うまくいかないときにどうしようといった悩みがあるときに、お互いに気軽に相談できる場があるとよいと思う。
・　現在、大人向けのオンライン教室を行っているが、最初に全員が集まってから、各部屋で個別に１時間ほど話をした後、最後に全員が戻ってきて、感想などを話している。些細なことだが、そういう場があると他愛のない話ができて、それがすごく大事だと思った。

(韓 昌熹 委員)
・　オンラインに参加する子どもの年齢はどのくらいか。

(懇話会・田口委員)
・　私の経験だが、続けられるのは小学校高学年や中学生である。低学年は集中力が短く、いろいろな工夫が必要になるし、続かない子も多い。

(韓 昌熹 委員)
・　参加する子どもたちは、親の携帯電話などを使って参加するのか。

(懇話会・田口委員)
・　そうである。スマートフォンだと画面が小さいので、せめてタブレットがあるとよい。子どもは見えにくいから面白くないとなってしまう。

・　インターネットが家でつながらない場合に公民館でつながるかというと、県西地域では難しい。モバイル Wi-Fi を借りたり、団体としては公民館に Wi-Fi の整備をお願いしていく必要もあると感じている。
・　仕組みを作った後どうするか、どうつなげて継続していくか、そこに心を砕けるとよいと思っている。

(韓 昌熹 委員)
・　各家庭の経済状況として、オンライン環境を準備する余裕はあるのか。

(懇話会・田口委員)
・　家庭による。保護者が働いていると連絡手段がなく、実施できないまま終わってしまうこともある。

(柳 晴実 委員長)
・　その課題をクリアできる環境はまだないということか。

(懇話会・田口委員)
・　時間を決めるだけでは無理で、つながる工夫が必要になる。慣れてしまえば大丈夫だが、最初の１か月くらいは伴走が必要だと思う。
・　母語や母文化の保持や習得について、私たちはそこまで行けていない。学習支援や日本語支援で手一杯で、そこに人員が避ける状況ではない。
・　必要なことだと思うが、子ども自身が母語や母文化を大切にしたいと思うような働きかけがないと、意味がない。教室でも学校でも母語や母文化が大切であることを言い続けてサポートしていくことが大事である。
・　子どもたちは、いつも受け手側の立場で自分たちで発信する機会がない。母語でも日本語でも、自分を見せる機会を学校や地域で作れるとよい。

(リディア ワンタ 部会長)
・　保護者の支援という話があった。外国人保護者と子どものための支援について提言しようと思っているが、どのような支援を行っているのか。

(懇話会・田口委員)
・　例えば日本語を学びたいという保護者に対して日本語のサポートをする。
・　就学前の支援としては、健康診断のサポートや、学校に提出する書類の確認、入学前説明会に同行することもある。保育園に入りたい方のサポートもしたことがある。

・　高校に入るための三者面談に、保護者と学校の許可を得て同席して、どうしたらよいか一緒に話を聞いたこともある。

（リディア ワンタ 部会長）
・　学校は書類がたくさんあるので、理解するのが大変である。

（懇話会・田口委員）
・　日本語教室に持ってきてもらえれば、この書類は大事といった形で仕分けたりすることはある。

（金 愛蓮 委員）
・　ＳＯＳがあれば行くとのことだが、当事者はどうやって団体を知るのか。

（懇話会・田口委員）
・　保護者同士の口コミで知る方が多い。先生にも知ってもらうために学校でチラシを配る必要はあると思うが、それで来てくれる人はあまりいない。口コミで徐々に広がって、学習支援から就学支援につながったりもする。

（韓 昌熹 委員）
・　活動の中で、行政との関係はどれくらいあるのか。

（懇話会・田口委員）
・　中井町の教育委員会とはつながっている。協議会に呼んでもらったり、町の外国人インタビューで一緒に人を探したり、イベントの声かけもある。
・　地域のボランティア研修を始めたときは、町も同じことをしようとしていて、予算を取ることになり、交通費が500円から1000円になった。
・　伊勢原は教室の場所探しに苦労したが、市民協働課が協力してくれて、コミュニティセンターを無料で借りられる協定を結んだ。

（レ ダンコア 委員）
・　構成員を教えてほしい。外国につながる方もいるのか。

（懇話会・田口委員）
・　20～25人の会員が参加している。秦野市、伊勢原市、中井町以外だと、横浜市の方もオンラインサポートで一緒に活動している。サポーターとしては外国籍の方もいる。教会で日本語教室を開いているが、ブラジルの牧師さんがぜひ教室を作ってほしいということで、実施していたりする。

３　部会別協議

＜情報部会＞

（ロボ ナシメント 部会長）

・　事前の委員長・副委員長との打合せで、今後の流れについて話した。今日はできるだけ提言案の内容をまとめて最終形に近い形に持っていきたいと思っている。まとめ方を考えなければいけないが、アイディアはあるか。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　箇条書きにした方が分かりやすいと思うが、いくつか提言案があるので、分けて作業した方がよいのではないか。
・　ただ、項目立ての仕方は統一した方がよい。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　他の部会がどのようにまとめるか分からないが、最終報告には全ての部会の提言が入ることになる。書き方を統一しないと、部会ごとに報告書の書きぶりがバラバラになってしまう可能性がある。
・　過去の会議の最終報告を読んだことはあるか。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　過去のものは箇条書きだったと思う。提言ごとの対応状況が記載されているが、どの程度実現できているか分かりにくいという話があった。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　それは最終報告ではなく、施策化状況ではないか。最終報告の修正は、オープン会議と同様に、Google ドライブで共有する方法でよいか。

（岩松 佐由美 副委員長、祁 静 委員）

・　それが一番やりやすい。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　書き方の統一については、柳委員長にも伝えて決めてもらおうと思う。
・　オープン会議では、発表した提言案について意見をいただいたかと思う。

（祁 静 委員）

・　発表した三つの提言案のうち、ホームページの管理改善と、日本語オンライン教室について意見があった。

（岩松 佐由美 副委員長）

- オープン会議でいただいた御意見を受けて、小中学校で開かれる国際教室については、まずは学校で使う日本語を基礎から学べれば、学校の先生に質問できるようになるので、そこをメインに変えたいと思っている。
- Wi-Fi の貸出について、自分で調べた限りでは、NPO法人で無償で貸出しているところもあった。ただ、年収要件があり、貧困世帯しか借りられない。
- 日本では親の年収を見るが、昨年の年収で判断するので、今収入がなくても借りられないことがある、そこを解決する方法を調べて盛り込みたい。
- 外国籍の子は、日本語を話せたとしても日本文化を知らないので、先生が説明した内容を理解できないことがある。そういった文化の基礎的な部分も教わることができて、分からないことを聞けるような場にしたい。
- そういった内容を説明できる先生から教育を受けた方がよいと思う。

（ロボ ナシメント 部会長）

- 参加している生徒が先生に質問できるようにするのか。

（岩松 佐由美 副委員長）

- そうである。外国籍の子は言葉も思考も異なり、日本の文化的背景を知らないため、説明を理解できない。そこが分かるように、始まる前に研修を受けられるとよいと思う。
- ホームページの管理改善については、提言案を書き換える予定があるか。

（ロボ ナシメント 部会長）

- オープン会議でいただいた意見を提言案に落とし込みたいと思っている。
- 提言は改善に向けたスタートに過ぎないので、実際は県側で、提言内容を考慮しながらホームページ全体の改善方法を考えることになる。あまり具体的な意見を入れても、県側がそのまま受け入れるかどうかは不明である。
- あまり細かく書かずに、大まかな内容にしておいた方が、県側の役に立つと思う。オープン会議の意見を細かく反映するのではなく、いただいた意見を参考に少し書き換えればよいと思う。
- 提言内容の修正について、何か意見はあるか。

（祁 静 委員）

- 大枠の部分を改善してもらうことが大事だと思う。細かい情報は、外部で情報発信しているページなどにリンクを張って確認できればよいと思う。

・　大枠さえ決めれば、細かい修正内容まで提言する必要はない。例えばイラストで分かりやすくするとか、小さいスペースに多言語の情報を詰め込むと逆に分かりにくいとか、そういった考えを示せばよいのではないか。

（ロボ ナシメント 部会長）
・　現状の課題は、外国籍県民にとって分かりづらいことである。日本語があまり分からない人にとっては理解しにくい。

（祁 静 委員）
・　最初の入口が分かりにくいので、現状の「目的から探す」のタブのところに、一つ枠を設けて、外国籍県民向けのメニューを追加してほしい。
・　メニュークリック後のページでは、言語別や手続別で選択可能とするなど、分かりやすく分類していただけるとありがたい。
・　言語別が一番分かりやすいと思うが、何か国語に対応できるかは課題。また、希少言語の対応は難しいので、やさしい日本語で対応する方法もある。最初から全ての言語に対応することはできないので、外国籍県民の数が多い言語から優先して対応するなど、徐々に改善してもらえるとよい。

（ロボ ナシメント 部会長）
・　多言語対応して、自動翻訳の機能をなくせるとよい。祁委員のスマートフォンでは、県のホームページで「Translate」を選択した場合、中国語に自動翻訳されるか。

（祁 静 委員）
・　端末の設定によると思うが、英語に翻訳されたものが表示される。

（ロボ ナシメント 部会長）
・　岩松委員はどうか。

（岩松 佐由美 副委員長）
・　自分も英語である。

（祁 静 委員）
・　ニーズの高い言語が基本設定になっているのだと思う。画面上で自分の言語を選択できるが、そもそもこのページにたどり着くまでが分かりにくい。
・　中国語に翻訳された内容を見ると、７～８割は理解できる。

（岩松 佐由美 副委員長）

- スペイン語は不自然な翻訳になっていて、理解できない部分がある。

（祁 静 委員）

- 多言語で情報提供している団体では、自動翻訳でなく、人が翻訳しているので、そういった情報につなげられるとよい。

（ロボ ナシメント 部会長）

- どのようなページ構成にするか、具体的なイメージはあるか。

（祁 静 委員）

- 大和市のホームページは、ライフシーン（子育て、教育など）に合わせたメニュー構成になっている。ごみの捨て方や防災の情報も多言語であるとよい。生活していくうえで最低限必要な情報があるとよい。

（ロボ ナシメント 部会長）

- サイト全体の構成を考える必要がある。そのような情報が提供されている日本語のページはあると思う。

（祁 静 委員）

- 県のページに新しく多言語で情報を載せるのではなく、他団体が既に提供している情報を整理して、リンク先として掲載することができればよい。

（ロボ ナシメント 部会長）

- 他団体のリンク先を入れるかどうかは県の判断次第だが、まずは県で提供している情報につなげることが大事である。
- 「外国籍県民の方へ」のリンクから遷移したページでは、まず冒頭にページの使い方等の説明が必要である。そして、日常生活に関する大事な項目をメニューとして列挙する形でデザインするとよい。
- そこから県が提供している様々な情報につなげる形にできるとよい。
- どの言語に対応するかは、その次の問題である。

（祁 静 委員）

- まず外国籍県民向けの入口があって、そこから入った後で自分の言語を選択して、ライフシーンに合わせたメニューを選択するという順番が分かりやすいと思う。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　横浜市のホームページを見てほしい。言語選択後、ライフシーンに合わせた項目が選択できる。やさしい日本語を含めて８言語が選択可能である。

（祁 静 委員）

・　県のホームページに他団体のリンクを載せる際に、ＮＰＯは問題ないが、それ以外の団体は不可など、何か明確な基準はあるのか。

（事務局）

・　明確な基準はないが、市町村の情報を載せるよりもハードルが上がる。正確性などを精査するのに時間を要する。

（祁 静 委員）

・　もう一段階、自分が住んでいる地域を選択するような構成にして、各市町村のホームページにリンクを張ればよいのではないか。

（ロボ ナシメント 部会長）

・　県が提供する情報を多言語化することが目的なので、市のホームページに飛ばすのは、そもそもの趣旨が変わってくるのではないか。

・　まずは、県が日本語で提供している情報をどのように外国人に対して適切に提供するかということを考える必要がある。

・　外国人がページの掲載内容について質問したいときに、どうすればよいか分からない。問合せ先はあるが、日本語が分からないと問合せできない。

（事務局）

・　ページ上に問合せフォームがあり、母語で問合せいただいた場合は、時間を要してしまうが、翻訳したうえで対応することになると思う。

（祁 静 委員）

・　多言語支援センターかながわは一番言語対応が充実しているので、リンク先として掲載すれば、県との橋渡しをしてくれるのではないか。

（事務局）

・　それが一番早く対応できると思う。

（岩松 佐由美 副委員長）

・　私の提言については、修正したものを次回の会議までに共有する。

＜次世代・教育部会＞

（肖　欣怡 部会長）

- 本日は田口委員に御参加いただいているので、まず、オープン会議時点の提言案について、内容と経緯を説明する。
- 次世代・教育部会では、神奈川県の県立高校の高校生をターゲットとして、国際理解クラブ活動を促進するモデル事業という提言案を作成している。
- その背景として、多文化共生社会を迎えて学校現場にも外国にルーツを持つ生徒が増えており、国際理解教育の重要性が高まっていることがある。
- 国際理解クラブ活動をきっかけに、特に若年層の外国籍県民のポテンシャルを発見するため、社会で接する機会を作ったり、活用できる場を必要とするということも書いている。
- また、次の点については課題や意見があって後ほど説明するが、その場をきっかけに外国人コミュニティや支援団体同士の横のつながりを作るという提案も書いてある。
- 具体的な企画の概要としては、県として実現可能性が高い県立高校の高校生たちを対象として、いくつかの活動を行うことを想定している。具体的にどのような内容を行うのか、まだ検討している段階である。
- 今後のこれからの計画と方向性、予想される課題の部分も、あくまでオープン会議時点のものなので、実際にどういう形で書くとよいか、田口委員の御意見を伺いたいと思っている。
- 前回の会議で、部会内でもいくつか提言案に対して意見があった。私から聞きたいことを質問するが、皆さんからも補足があればお願いしたい。
- 提言案の中で、国際理解というタイトルになっているが、オープン会議の参加者から、多文化共生の方がよいのではないかという意見があった。
- 前回の会議では、多文化共生社会をめざす思いはあるが、国際理解という手段を強調したいので、この言葉を使いたいという結論になった。

（韓　昌熹 委員）

- 元々は三人が別の提言素案として出していた。
- 一つ目として、日本にいる留学生や外国人の活躍の場を作るということで、その人たちが多文化共生や国際理解の講演会を関係団体とつながりを持って開催するという話があった。

・　二つ目としては、母語と日本語の教育に関する提言素案があった。
・　三つ目は私の提言素案で、外国人コミュニティや関係団体、学生のグループなどを総合的にネットワーク化するというものだった。
・　それらを部会で話し合って、一つにまとめたのがこの提言案である。
・　我々が何か教えたり、実施を促すのではなく、自発的に学生たちが動いてほしい、学生たちが自立して検討を進めてほしいということで、このような提言案になっている。
・　多文化共生という言葉についても、オープン会議の参加者は、検討の経緯を知っていて質問したわけではなく、発表だけ聞いて、多文化共生の方がよいと言ってきたように思う。
・　我々としては、学生たちが自分を理解し、海外について理解し、お互いを理解することが大事だと考えている。多文化共生は政策の結果なので、その前の段階としてお互いを理解するところを進めようということで、国際理解クラブ活動を促進するというタイトルになった。
・　そうした検討を重ねる中で、県立高校をターゲットに国際理解クラブ活動をしませんかと声をかけて、そのときに必要なチューターなどのネットワークは、我々がつながっている国際交流ラウンジなどから、必要な人材を提供したりということを考えている。

（肖　欣怡 部会長）
・　「ゆう」の活動では、生徒たちが支援を受ける側であることが多いと思うが、私たちの提案の視点としては、生徒が主体的に活動して視野を広げて、今まで知らなかった国や文化を知ってもらうという目的がある。
・　生徒たちが自主的に取り組んでいる事例があれば教えていただきたい。

(懇話会・田口委員)
・　自分たちの存在を見せるような機会があるとよい。この方法がよいかどうかは分からないが、例えば在県枠がある高校の生徒たちが集まって、文化祭でミニ万博のようなことを行うと、地域の方にも知ってもらうことができる。日本人の生徒たちにも知ってもらうよい機会になる。
・　ただ、そのような形式だと在県枠の子どもたちと日本人の子どもたちが別々のグループになってしまうので、日本人の生徒も参加して一つのブースを作り、一緒に発表などができるとよい。

(韓 昌熹 委員)

- イメージしているのは、外国人が主体的に活動するクラブ活動ではない。所属しているのはほとんど日本人で、外国人留学生などにつながっている人が一人いるかどうかといったイメージである。
- その日本人の生徒たちが、外国人留学生や、自分たちが関心がある人について理解を深めたりするのが最初の段階である。
- 例えば、複数の学校で国際理解クラブ活動が行われていれば、各学校を集めた県大会を実施することも検討している。
- 質問の意図は、学生の主体性を上げるためにはどうしたらよいかという点である。

(懇話会・田口委員)

- 学生たちが国際理解について興味を持たないと始まらない。先生や大人が興味を持ってもらうための仕掛けをしないと気づかないと思う。
- 例えば地域のボランティア教室に行くとか、Me-net が主催する若者交流のイベントのお手伝いをするとか、そういうことをしないと始まらない。
- 私たちの団体で、推薦で大学に入るためにボランティア活動をしたいという高校生からの声かけがあった。こちらは人材が足りないのでぜひ来てほしいということで、Win-Win の状況というか、お互いにメリットがあった。
- 高校生に現場を知ってもらうよいチャンスである。生徒たちは、いろいろなボランティア団体に登録して自分たちで参加する。推薦のためという下心はあるが、やらないよりやる、きっかけを作ることにはすごく意味がある。

(韓 昌熹 委員)

- 大人になったときの経験値が違う。

(懇話会・田口委員)

- 全然違う。国際理解に関心がある生徒はいるという感触を持っている。
- 最近はKポップが流行っている。Kポップのミュージシャンに関心を持ったとしても、韓国文化にまで関心を持つケースはあまりない。
- きっかけを作ることができても、仕掛けにはなかなかつながらない。例えば国際理解をテーマとしたシンポジウムを実施したときに、きっかけにはなっても、仕掛けまでにはならないことが課題である。

(懇話会・田口委員)

・　国や地域ではなく、人と人との結びつきになるとよいのではないか。韓国の人だけど同じ生徒といったような結びつきができると、その人の向こうにある国という捉え方になると思う。

(韓 昌熹 委員)

・　国際理解クラブ活動を勧めると、海外に関心のある人たちが集まると思う。海外に関心がある人たちは、ヨーロッパなどに関心がある人が多いと思う。

・　身近な外国人に関心を持てるところに至らないと、多文化共生にならない。日本に住んでいる外国人はヨーロッパの人は少なく、アジアや東南アジア出身の人が多いが、そこに関心を持たせるにはどうすればよいか。

(懇話会・田口委員)

・　同じ教室で学んでいる仲間の中に、外国にルーツがある人がいることに関心を持てないと、遠い国の話になってしまう。

・　大学生を見ていても、最初は留学生支援などキラキラした方に興味を持つが、学習支援で子どもたちと毎週関わっていると、関心が変わってくる。

・　身近な外国人、その人自身に目を向けるようになるためには、誰かに来てもらって話を聞くとか、クラスにいる仲間の子に話を聞くとか、そういう小さな取組の積み重ねが必要である。

・　また、在県枠で高校に入った生徒は、その中で固まってしまいがちなので、そこをばらけさせるような工夫も必要である。

(韓 昌熹 委員)

・　核になる生徒がいて、その生徒との人間関係の結びつきを発展させて国際理解を進めることをイメージしているが、人数的なボリュームはどれくらいがよいか。一人を囲んでいる日本人が、どれくらいいるとよいか。

(懇話会・田口委員)

・　数人でもよい。生徒たちだけでは動きにくいので、先生や外部のコミュニティが学校に入っていって、そういう場を提供するといったことが必要。

(サプコタ ドルラズ 委員)

・　週に何回、月に何回など、定期的にやらないと意味がない。日本生まれ、日本育ちの子どもだと、自分の国の言葉が話せず、文化も分からない。

・　そういう子の場合、日本人の子どもと一緒に勉強しても多文化共生にならない。そこで、母語・母文化を学べる場を設けたらどうかと思っている。

（韓 昌熹 委員）

・　日本人と一緒に、自分の母語・母文化について調べられるとよい。
・　日本に住む高校生で、日本語があまりできない子がいたが、片方の親は韓国人、もう片方は中国人で、家庭では日本語しか話していなかった。
・　自分は日本人というアイデンティティが高いが、あまり日本語のレベルは高くないし、母語も分からないため、友だちから不思議に思われる。
・　そういう話を聞いて、これからの多文化共生社会はそうなっていくのだと思った。アイデンティティがないまま成長する場合もあると思う。
・　その子は家庭で日本語で話すし、日常生活でも日本語を使っているため、時間はかかると思うが、日本語には問題がなくなると思う。
・　三つの国のバックグラウンドがあるなら、それを生かすというのも本人のキャリア的にはよいと思うが、そういうこともなかったという話を聞いた。

（懇話会・田口委員）

・　子どもがそうしたいと思えなかったのではないか。大人になって見つめなおすきっかけがあれば、そう思うかもしれない。

（韓 昌熹 委員）

・　なぜそういうバックグラウンドをアピールしなかったのかと質問したら、聞かれなかったからだと言っていた。本人が言いたくない場合もある。

（兪 大達 副委員長）

・　行政書士としていろいろな団体を見てきたが、子どもに対する支援は、教育支援が主な内容である。他にはどのようなサポートがあるか。

（懇話会・田口委員）

・　普段はどうしても学習になる。ただ、高校受験のサポートをしたときに、なぜこの学校を選んだか、将来どうしたいかといったことを記載するシートを作成するが、そこにボランティアが伴走すると違う面が見えてくる。
・　趣味や将来の夢などが見えて、ボランティアにとってもよい時間だった。
・　スライドをナレーション付きで紹介するデジタルストーリングテリング（ＤＳＴ）という手法があり、外国につながる高校生と一緒に作りたい。

・　横浜市内の中学校でも行っているが、子どもたちが自分を表現するうえですごくよい手法である。作品も素敵だが、作品を作るプロセスが大事。自分を語る、それを聞く人がいる、その点が醍醐味だと思う。
・　例えば日本人の高校生が一緒に語りを聞くなど、ボランティアだけではなく、若者が一緒にプロジェクトに携われるとよいと考えている。

（韓 昌熹 委員）
・　我々が考えているモデル事業は、始めるきっかけと、その取組が定着するための仕組みがない状況。学校の先生は業務が多く、対応できない。
・　人材を派遣するしかないかとも思うが、外部の人間がどこまで学生たちに寄り添って伴走できるかという点には疑問がある。

（懇話会・田口委員）
・　そもそも外部の人間が学校に入れるかという点にも、壁がある。

（韓 昌熹 委員）
・　こういった仕組みがあるということを学生たちに周知してもらって、国際交流協会から派遣する形にすれば、対応できると思う。

（懇話会・田口委員）
・　一過性のイベントではなく、定期的に関わり続けることが大事である。地域のボランティアでも学校とつながりたいと思っている方がいる。そういう気持ちのある団体とつながっていく。最初は学校の外でもよいと思う。

（韓 昌熹 委員）
・　最近は、部活を外部委託する学校もある。先生の業務量が多く、部活まで見られないため、企業等に委託している。この事業も同様の形になるかもしれない。

（レ ダンコア 委員）
・　一つのアイディアとして、外国につながる生徒や関心のある高校生向けにＤＳＴのコンテストを実施すれば、核となる人材も見つけられると思う。
・　各学校に普及するには時間がかかると思う。横浜市内の有志でメンバーを集めて、定期的に半年ぐらいイベントを実施してから、それぞれの学校に広めていく形としてはどうか。

(懇話会・田口委員)

- ＤＳＴはコツがいるので、サポートする側が自分のストーリーテリングを一回作った方がよい。語りを引き出すにも、聞いてもらう心地よさがあるので、そういうことを支援者側が知っているとうまくいく。
- 自分で一回作ってみると、編集やナレーションなど、どこが大変なのか分かるので、うまくサポートできる。
- コンテストもよいが、どの作品も素敵なので、そこで競争するのはストーリーテリングの趣旨とは違う気がする。作った本人がこういう思いで作りました、ぜひ見てくださいと紹介し、そこで参加者とやり取りする、そういう時間がとても大事だと思う。
- 高校で発表会ができたらよいが、まだそこまで約束ができていないので、学校外での発表になるかもしれない。

(レ ダンコア 委員)

- あーすフェスタを活用する方法もある。来年なら１年半くらいあるので、そこで上映会をやればよいのではないか。

(懇話会・田口委員)

- 横浜国立大学と吉田中学校が、一緒にそのような取組を行っている。

(韓 昌熹 委員)

- 最近の大学生は忙しい。関心がある人はよいが、関心がない人に一緒に活動してもらうには、インセンティブを与えないと難しいと思う。
- 私がラウンジの活動で大学生に来てもらう場合には、お金を払っている。手を借りるということではなく、主体的に取り組んでもらうことが大切で、お金をもらっている分、クオリティを担保させる。
- 学生はそういう経験をしたことが今後の人生で役立つし、そういう取組が国際理解、多文化共生につながるということで理事会を説得していた。

(懇話会・田口委員)

- 大事な視点ではあると思う。

(韓 昌熹 委員)

- 若い人が参加するには、無償では駄目だと思う。ボランティアは高齢の方が多く、経済的にも時間的にもゆとりがあり、自らの意思で参加している。

(懇話会・田口委員)

・　私たちは、助成金をいただいて、せめて交通費を出せるようにした。

(韓 昌熹 委員)

・　この制度の事前準備として、外国につながる高校一年生の生徒でＤＳＴに取り組む人を募集し、一緒に１年程度活動して、その子を核としたクラブを作って２年間活動する。計３年間のスパンで考えないと難しい気がした。

(懇話会・田口委員)

・　ＤＳＴは一つの方法なので、他のものでもよいと思う。

(韓 昌熹 委員)

・　自分を表現するような他の手段はあるか。

(懇話会・田口委員)

・　自分の母語で作品を見せる。デジタルではなくてもよいと思う。

(レ ダンコア 委員)

・　自分の国の伝統工芸を見せるといったこともできると思う。生徒たちにとっては、自己アピールをして、他の方に認められることが大切だと思う。

(サプコタ ドルラズ 委員)

・　高校生が主体的に考えないといけない。外部からの働きかけと、生徒たちの自主的な活動、どちらを優先するかが難しい。

(蒋 香梅 委員)

・　理想的な取組だが、突然高校に行ってこれをやろうと言っても難しい。提言の背景を理解している人が先頭に立って、連携先を考える必要がある。

・　例えばレダンコア委員が所属する団体で実施している国際理解教育など、そういう連携先を見つけて、団体と連携した取組として実施していく中で、他の学校に広げていくのがよいと思う。

・　今の段階で、具体的に何をするか、まとめておいた方がよい。

(韓 昌熹 委員)

・　我々がＮＰＯを作って、そこに学生が参加する形なら活動内容をまとめてもよいが、これは国際理解のための教育プログラムという施策を作っているものなので、意味合いが違うと思う。

（蒋　香梅 委員）

・　少なくともどこかの団体と連携しないと、できないと思う。

（肖　欣怡 部会長）

・　国際課に質問したい。今年は間に合わないが、来年以降のあーすフェスタで、県内の高校から募集した作品を展示するような企画は実施可能か。

(事務局)

・　あーすフェスタの企画委員会に入っていただき、話をしてもらい、案が通れば可能である。

（肖　欣怡 部会長）

・　ビデオでも写真でもよいが、自分の母語・母文化や多文化共生が表現できるような展示企画をするのが、現実的には最初の一歩だと思う。

(レ ダンコア 委員)

・　有志の高校生に参加してもらい、何ができるか、一緒に話せばよいと思う。

(韓 昌熹 委員)

・　企画委員会に参加する高校生は、年２～３人程度である。早めに大学が決まると、フェイドアウトしてしまうことも多い。

(事務局)

・　ボランティアで参加する高校生は多数いたので、興味がある高校はあると思う。例えば、横浜国際高校などと連携して実施できるかもしれない。

(韓 昌熹 委員)

・　広く声をかけるより、確率が高い学校に直接行く方がよいかもしれない。

(サプコタ ドルラズ 委員)

・　次回の会議で、部会に高校生にも参加してもらって、話ができるとよい。

（蒋　香梅 委員）

・　高校生や大学生を支援しているMe-netと連携してはどうか。

(兪 大達 副委員長)

・　既に取組を行っている団体に声をかけて、現在の取組内容を聞いたうえで、我々のアイディアを伝え、コラボできないか検討する方がやりやすい。

（サプコタ　ドルラズ　委員）

- 鶴見総合高校には「国際」の授業がある。可能であれば見学に行って、どのように授業しているか理解したうえで、取組内容を考えた方がよい。
- 私たちは県に提言するので、鶴見総合高校のような、県立高校を中心としたモデル事業を実施して活動を広めていくのが現実的である。

（肖　欣怡　部会長）

- 田口委員に伺いたい。行政とのつながりや地域とのつながりなど、初めて他の団体に声をかけるとき、どのように接するのが効果的か。

（懇話会・田口委員）

- お話を聞かせてほしいと尋ねると、団体によりＯＫの場合と、ＮＧの場合がある。ＮＧの場合、その地域で地道に活動を続けていくと、次第に周知されていく。時間はかかるが、仕方ないのでやっている。
- ＯＫの場合、最初に外国人数など地域の状況をヒアリングしてから、国際教室の状況などを聞いて、その後で私たちの活動内容を説明し、つながりを作っている。
- そこまでつながらなくても、話をした数年後にＳＯＳが寄せられたりすることもあるので、そういう行脚のような取組が大事である。
- また、学校、公民館、市役所で活動していると伝えることは大切である。団体を設立すると、団体登録できるメリットがある。また、社会福祉協議会とつながると、ボランティア活動の広がりが出てくる。
- 同じ活動をしている団体と横のつながりを作っておくとよい。例えば足柄地域で、自分たちではフォローできないため、オンラインでつないでほしいという要請が来たこともある。他団体と連携しておくと、いざというときに支援が受けられるようになる。
- なかなかうまくいかないが、試みるのはよいことだと思う。私たちも財源がないため、助成金頼みである。助成金から活動費や交通費を捻出している。地道な活動を続けていると、企業が寄附しようと声をかけてくれてくれることもある。ただ、そこに至るまでには時間がかかる。

（肖　欣怡　部会長）

- 通常、助成金や寄付金の申請に当たっては、ある程度の実績を出す必要があるので、ゼロからだと難しいと思う。

（蒋　香梅 委員）

・　国際教室の支援について、ボランティアの方々は、授業がある時間帯に入っているのか。それとも放課後支援という形で入っているのか。

（懇話会・田口委員）

・　前者である。例えば取り出し授業に子どもが二人来ていたら、一人には先生、もう一人にはボランティアがついて、同じ教室で違うことをする。

・　また、外国につながる子が在籍しているクラスに入り込み、子どもの横で今はこれをやっているとサポートするなど、授業時間内に行っている。

（蒋　香梅 委員）

・　それは教科学習の支援か。それとも母語支援を行っているのか。

（懇話会・田口委員）

・　教科学習の支援である。人材がいないため、母語支援まではできない。国際教室の子どもと日本語のワークを一緒に行ったり、社会の新聞づくりで何を書こうかとアイディアを練るなど、サポーターのような立場である。

（蒋　香梅 委員）

・　学校から依頼が来て派遣される形か。

（懇話会・田口委員）

・　中井町で国際教室を作ることになったとき、当初は別の大学に要請したらしいが、他の場所で活動中という理由で断られたという状況があった。

・　そのときに「何かできることはあるか」と聞いたら、ぜひ手伝ってほしいという話になった。タイミングがよかったため、学校に入ることができた。

・　小学校に入る場合は大学生のボランティアが多いが、ボランティア養成研修に参加してくれた高齢の方が定期的に入ってくれていて、国際教室の先生からも感謝されている。

・　これはうまくいったケースだが、うまくいかないところももちろんある。

（蒋　香梅 委員）

・　教育委員会を通して活動を行っているか。

（懇話会・田口委員）

・　通している。最初は教育委員会に話を聞きに行った。

（蒋　香梅 委員）

・　私たちも、高校に行くときは教育委員会にまず話をしなければいけない。教育委員会が国際理解クラブの必要性を感じたら、上手くいくと思う。

（懇話会・田口委員）

・　実際の困りごとがあって、意義を理解してもらわないとつながりにくい。
・　また、先生たちだけに負担がかかることにならない提案が必要だと思う。

（蒋　香梅 委員）

・　先生に負担をかけられないので、こちら側で何かしなければいけない。

（懇話会・田口委員）

・　外部の団体との連携について、学校側もオープンにならないと難しい。

（蒋　香梅 委員）

・　川崎高校ではフリースペースで飲み物を提供しており、高校生が誰でも行って話ができる。そういう高校をターゲットにしてもよいのではないか。
・　そこで外国籍の児童生徒が定期的にイベントを行うなど、それはそれでよいチャンスかなと思う。

（事務局）

・　神奈川県ではグローバル教育研究推進校や国際バカロレア認定校の取組を進めるなど、国際教育を推進しており、外国につながりのある子どもたちが多い。そのため、持ち込み方を工夫しないと、既に取り組んでいると言われて終わってしまう可能性がある。
・　外国につながる生徒が多数いて、独自の教育に取り組んでいるところがあるので、困りごとををうまく解決するような提案でないと難しい。

（蒋　香梅 委員）

・　そういう背景がある学校の方がやりやすいと思う。

（肖　欣怡 部会長）

・　ゼロから説明する必要がないため、先生の理解も得やすいと思う。

（事務局）

・　懇話会との合同会議で、Me-net の中心として活動している高橋清樹委員に、協力してできる部分がないか聞いてみてもよいかもしれない。

＜社会福祉部会＞

（リディア ワンタ 部会長）

・　先日、県の所管課からヒアリングしたり、専門家の意見を聞くなどして、どのように提言していくかを考えるうえで、よいお話が聞けたと思う。

・　ハリロバ委員は、伺った意見を受けて、提言内容についてどう考えるか。

（ハリロバ ナタリア 委員）

・　私の意見は変わらないが、日本で何かをしようと思うと、お金がかかる。働いている人は税金を払っていて、その税金からお金が使われる。外国人は言葉の壁があるから特別扱いされて、お金を多く使って助けるべきかというと、私も外国人ではあるが、はっきり悪いとかよいとか言えない。

・　問題解決として最初から訴えているが、全ての問題にＡＩや最新技術をできるだけ活用することで、人件費も時間も節約できると思う。

（リディア ワンタ 部会長）

・　どのようにＡＩを活用することを想定しているのか。

（ハリロバ ナタリア 委員）

・　相談窓口に電話すると、各言語でＡＩが簡単な質問をして、相談者がもっと詳しい内容を聞きたければ、コーディネーターに電話をつなぐ。途中までＡＩが対応することで、問題の50%は解決できると思う。

・　年配の方は電子機器を扱うのが苦手だが、若い世代は普段からＡＩと接触している。ＡＩのロボットと会話できるおもちゃがあり、既に使われている技術である。

（柳 晴実 委員長）

・　ＡＩを活用できるところには積極的に活用してほしいということを提言に入れたいということか。

（ハリロバ ナタリア 委員）

・　そうである。

（柳 晴実 委員長）

・　社会福祉部会の提言案の一つ目から、内容を確認したい。

（リディア ワンタ 部会長）

- 発達障害と診断された外国人の保護者のサポートについて、日本語のサポートや心理的なサポートが必要だと思う。
- 日本語がうまくできないために発達障害と診断されてしまうケースがあるので、１年間だけではなく、２年か３年程度サポートして、そのときに専門家が診断すれば、その子が本当に発達障害かどうかが分かると思う。

(ハリロバ ナタリア 委員)

- 経験上、例えば幼稚園に通う子どもの発達が遅れているため、幼稚園の先生から保護者に検査をお願いして、検査したら発達障害があると言われたときに、保護者側が納得できないケースが多い。
- 小学校に入ると特別支援学級に入れられるが、そのクラスにいることでさらに発達が遅れたりする。保護者側から小学校に対して、普通のクラスに移してほしいと訴えるトラブルが多い。
- 初めに発達障害の子どもの親の意見をきちんと聞くべきである。通常学級に入れるか特別支援学級に入れるか悩んでいる人も多い。学校側の対応には柔軟性がなく、学年の途中でも保護者の意向でクラスを移れるとよいのだが、一度入ってしまうと、次の学年になるまで抜けられない。

(柳 晴実 委員長)

- それは外国人の子どもに限った話ではない。日本人も含めて、学校全体として発達障害の子どもにどこで教育を受けてもらうかという問題である。
- 提言の中身としては、外国人で発達障害について知らない親も多いので、そこに情報をどう届けるか。提言としてはそこに絞ることになると思う。
- 先ほど田口委員の話を聞きながら思ったが、外国人の親が集まる場、つながりやすい場は大体決まっている。最近はインターネットに情報が全部載っているが、当事者の手元に届かないことが一番の課題である。
- 現場でつながっている人たちにその情報を伝えて、そこから情報を広めてもらうことが大事だと分かってもらうことも大切である。
- 自分の子どもの教育をどう選択するかについては、親と子どもと学校で話し合って決めるべきことなので、その点を提言の中に入れ込んでいくのは難しい。情報をどう届けるのかという部分が、提言のメインテーマになると思う。

（リディア ワンタ 部会長）

・　保護者に情報が届いたとしても、母国では発達障害の子ども向けの学級がなかったので、日本語が話せないから発達障害と突然言われても、理解できないと思う。

（柳 晴実 委員長）

・　そこも含めてお知らせしなければいけない。

（リディア ワンタ 部会長）

・　その子が本当に発達障害なのかどうか。日本に来たばかりでまったく日本語が分からない、そういう子でも発達障害の可能性があると言われる。

・　なぜそのように判断したのか、保護者に対する精神的なサポートも必要になると思う。最近は多言語でも情報提供されているが、分かりにくい。

（柳 晴実 委員長）

・　提言の内容としては、①発達障害について外国人に分かりやすく伝える必要があること、②外国人の子どもの場合、言葉の問題があるため、日本人の子どもを判断する際と違う視点が必要になること、③そうしたことに悩んでいる保護者のサポートが必要であること、④それらの情報を外国人当事者と支援者側に伝えること、これらの４点で整理する形になると思う。

・　発達障害と診断される子どもの現状について報告してほしいという部分もある。外国人側に報告してほしいということか。

（リディア ワンタ 部会長）

・　そうである。外国人の保護者に報告してほしい。

（柳 晴実 委員長）

・　発達障害の説明資料に、現状の説明が分かりやすく入っていればよいか。

（リディア ワンタ 部会長）

・　よい。

（ハリロバ ナタリア 委員）

・　発達障害と診断された場合、学校に情報が来るのか。

（柳 晴実 委員長）

・　学校からは、検査を受けてくるように言われる。

(鈴木 クリスチーナ 委員)

- 児童相談所で行う発達障害の知能検査は二種類あるが、どちらも日本の子ども向けに作られたものである。外国籍の子どもがその検査を受けると、問題が起こる。それぞれの国に合わせた知能検査になっていないため、保護者が思っていることと結果が異なり、言い合いになるケースが多い。

(リディア ワンタ 部会長)

- 親の意見と検査結果が一致していない。

(鈴木 クリスチーナ 委員)

- 子どもは自分が慣れている環境ならできるが、日本の知能検査を受けるとできない。例えばブラジル式の生活をしているのに、そういう配慮がない。

(ハリロバ ナタリア 委員)

- 育った文化による差は大きい。アメリカ育ちの子どもが走り回ったり話し続けているだけで、精神的に不安定だとされてしまう。アメリカではずっと黙っている方が変に思われる。

(柳 晴実 委員長)

- ただ、子どもたちの生活圏全てに合わせて検査を実施することも難しい。そういう問題意識を持って関わってほしい、日本で育った子どもと同じ基準では一概に判断できないということを伝えられるとよい。

(金 愛蓮 委員)

- 何を提言をするか整理した方がよい。一つは発達障害というものを外国人の保護者に正しく伝えてほしいということがある。
- 日本語ができないことが原因で発達障害と診断されてしまうケースがあるので、第三者の意見も含めて保護者と相談しながら決めてほしいということもある。
- 教育委員会に日本語の支援のあり方を考えてほしいということもあるので、何のために私たちが提言をするのか、考えた方がよい。

(ハリロバ ナタリア 委員)

- 発達障害と診断された子どもの保護者の支援が必要である。保護者の心のケアや、学校側からのきちんとした説明も必要である。

（リディア ワンタ 部会長）

・　発達障害と診断されると、なかなか通常の学級に戻ることができず、将来的にあの人は発達障害なので仕事ができないと見られてしまう可能性もある。保護者へのサポートと、子どもへのサポート、両方が必要である。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

・　行政の相談窓口は、英語、中国語、韓国語、スペイン語、ポルトガル語で対応しているところが多い。そういった言語の保護者には必要な情報が届いていて、サポートもある。

・　インドネシアやフィリピンの方が増えているが、サポートできていないことが大きな問題である。そういう言語にも相談員を付けるべきだと思う。

・　全てをボランティアに任せるのではなく、きちんと報酬を払って相談員を入れた方がよい。

（柳 晴実 委員長）

・　この提言案は、皆さんから出た論点をもとに整理する感じになると思う。

・　二つ目の提言案について、先日多文化高齢社会ネットかながわ（ＴＫＮＫ）との意見交換もあったが、それを踏まえてどう整理していくか。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

・　介護に携わる外国人労働者のことが先に書かれている。労働者が相談できる場ではなく、高齢者が相談できる場が必要である。働いている人たちはある程度相談できていると思う。

（金 愛蓮 委員）

・　かながわ外国人すまいサポートセンターは、県全域が対象だと思うが、どの地域からの相談が多いのか。

（柳 晴実 委員長）

・　事務所が中区にあるので、横浜市内が一番多い。その次に川崎市。ただ、県全域を対象に活動しているため、数は多くないが、秦野市、伊勢原市、小田原市から相談が来ることもある。

（金 愛蓮 委員）

・　高齢者はますます行動範囲が狭くなるため、地域密着型ではないと絶対に成功しない。各地域に国際交流ラウンジがあるからそこに行く。

・　高齢者の集いの場を提言するなら、各地域で実施できるように県がまとめて場所を貸すようなシステムを作らないと実現できないと思う。

(鈴木 クリスチーナ 委員)

・　コミュニティのリーダーなど、地道に誰かがやらないとどうしようもない。

(柳 晴実 委員長)

・　地域でも外国人に特化した集いの場はあるが、あまり多くない。
・　先日、あーすフェスタで外国人高齢者が集まるイベントを企画するという話をしたが、開催日にいろいろな地域から集まることが可能かどうか。
・　一回のイベントなら何とかなるかもしれないが、日常化していくことを考えると、やり方を考える必要がある。各地域でどのように実施するかを検討しなければいけないし、誰が実施するのかという点も課題である。

(鈴木 クリスチーナ 委員)

・　外国人が一番集まるのは日本語教室である。

(ハリロバ ナタリア 委員)

・　いろいろな日本語教室に行ったが、年配の人を見たことがない。

(柳 晴実 委員長)

・　先日参加した研修会で、地域ケアプラザで働いている人から、外国人高齢者への対応に困っているという話があった。
・　そういった人をサポートする仕組みとか、活用できるものがあるとよい。

(ハリロバ ナタリア 委員)

・　宗教のお祭りには人が集まる。キリスト教はいくつかの宗派があるが、ロシアのお祭りに皆が集まってくる。高齢者も来る。逆に若い人が少ない。

(リディア ワンタ 部会長)

・　先日、横浜市内でイスラムの断食明けのイベントがあったが、1,000人ぐらい参加していた。若い人が多かったが、年配の人たちも母国語で話したり、料理を食べたりしていた。そういったイベントに相乗りした方がよいと思う。

(鈴木 クリスチーナ 委員)

・　その場合、参加するのが各コミュニティの人たちになってしまう。

（リディア ワンタ 部会長）

・ 宗教単位でも、高齢者が集まれる場所があるとよい。インドネシアだけでなく、例えば中国の高齢者が集まるような場所があってもよいと思う。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

・ ふれあい館は成功例である。地域に集まれる場所がある。そういうものが他のコミュニティにもあるとよい。

（柳 晴実 委員長）

・ ふれあい館も外国人向けというわけではない。川崎は在日韓国・朝鮮人の町だったが、外国人の層がだいぶ変わってきている。

・ 今まで作ってきたベースがあるから、そこに違う国の人たちが来たときにこれまでの経験を生かしながらうまく対応している。

・ 他の場所で同じようにできるかというと、なかなか難しいかもしれない。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

・ 専有して使用できる場所がない。部屋を借りるだけでも大変である。

（柳 晴実 委員長）

・ 言葉や文化の壁があり、地域の施設には入りにくい、なじみにくいところがある。外国人の高齢者を集めて何ができるようになるとよいのか。

・ 例えば母語で話して横のつながりを作ることを目的とするなら、コミュニティ、モスク、協会などに集まり、交流する場を作るのが一番よいと思う。

・ 言葉や国籍を超えてもっと広い範囲で集まるのであれば、別の形が必要になる。どこにポイントを置いて集う場を考えたらよいか。

（ハリロバ ナタリア 委員）

・ 高齢者が手作りした小物を販売したり、コンサートを行ってはどうか。

（柳 晴実 委員長）

・ 集まる目的を何にするか。販売やコンサートは人を集めるためにはよいが、そこで何をしたいと思っているのかによって、イベントの中身は変わる。

（ハリロバ ナタリア 委員）

・ 毎回テーマを変えないと、参加者が飽きてしまう。高齢者が主役になれるようにしないといけない。時間をかけて何かを練習し、当日発表するなど。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

- 外国人高齢者向けのワンストップセンターを一か所作って、そこで相談もできるし、任意の活動もできるようになるとよい。

（金 愛蓮 委員）

- 私が住んでいる団地はとても古く、住んでいる人たちがお年寄りになって、若い人が住まなくなっている。
- 県住宅供給公社が相模女子大学とプロジェクトを組んで、建物をリノベーションして綺麗にしたり、カフェをオープンしたり、週１回子ども食堂を運営したりしている。
- 最初は人が来るのかと思って見ていたら、お年寄りが集まるようになった。カフェに並んだり、外に座れるスペースもあって、天気がよいときはそこでお茶したりしている。
- ただ、そこで外国人を見たことがない。外国人の若い女性が働いているのは見たことはあるが、利用している人がいないから、もしチラシを工夫して作れば来るかもしれない。
- 例えば、週１回でも今日はベトナム料理、次は別の国の料理といった感じで紹介したら、日本人も外国人も集まると思う。

（ハリロバ ナタリア 委員）

- 日本の老人会は、どのような活動をしているのか。

（リディア ワンタ 部会長）

- カラオケ、お茶会、リハビリなどを行っている。

（金 愛蓮 委員）

- 私の地域では、リハビリに北里大学の先生が来る。ちょっとした老人のコミュニティができている。

（リディア ワンタ 部会長）

- ただ、外国人はそこに入りづらい。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

- いちょう団地には、コロナ禍の前はお年寄りを見守る会があった。
- いちょう団地は外国籍の方が非常に多い。そういう活動は、団地であれば団地内で呼びかけや見守りをしてくれる人がいないと難しい。

（金 愛蓮 委員）

- 行政側に伝わる何かがないと、理念的な提言で終わりになってしまう。

（柳 晴実 委員長）

- 一つ目は、支援者のためというより、外国籍の高齢者やそれを支える家族などが問合せをしたときに、ワンストップで対応できるような内容にする。
- 高齢者の集いの場づくりについては、どのようにまとめたらよいか。

（ハリロバ ナタリア 委員）

- 上大岡の国際交流ラウンジは活動が盛んである。友人が勤めているが、外国人向けのイベントが多く、地域の人がラウンジの存在をよく知っている。
- 実験的に、ラウンジと一緒に高齢者を集めるイベントを行ってはどうか。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

- 子ども向けのイベントや日本語教室はあるが、高齢者は来ていないのではないか。
- （ラウンジに勤めている）レダンコア委員や蒋香梅委員に確認してみる。

（柳 晴実 委員長）

- あーすフェスタでイベントを行う話も、どこかで一回やってみてイベントの存在を知らせる。その後は人を集めるのが大変なので、どこかの地域に限定してラウンジなどでやってみる、そこから広げていくイメージだった。

（金 愛蓮 委員）

- 外国人高齢者には二つのパターンがある。在日など長年日本で暮らしている人は、日本語もそれなりに話せるし、コミュニティにも参加している。
- 一方、ニューカマーの高齢者は、日本語の支援を受けられない人もいる。近所に母親を車いすに乗せて散歩しているインド系の方がいる。おそらく家族が日本に母親を呼び寄せたが、行くところがなく、歩けないから普段は家にずっといて、たまに車いすで散歩しているようである。
- この提言案を考える際に、そういう方をイメージしたこともある。

（鈴木 クリスチーナ 委員）

- 施設で問題になるのは、日本語を話すのが面倒になって母国に戻ってしまうケースである。そういう方をサポートをしていく必要性はあると思う。

（リディア ワンタ 部会長）
・ 高齢者向けの日本語教室とするか。

（柳 晴実 委員長）
・ 提言の中で限定してしまうと、その内容になってしまう。
・ 外国人高齢者が集う場が大事ということを大きく出して、例としてふれあい館や高齢者向けのクラブ活動について書くなど、幅を持たせた方がよい。
・ さらに、そういうことが地域や現場に合わせて実施できる制度を作ってほしいなど、県が実現できる内容が伴わないと、提言する意味がないと思う。

（鈴木 クリスチーナ 委員）
・ 今ある場所、例えば国際交流ラウンジに、そういうプログラムを作って入れてもらえるとよい。

（柳 晴実 委員長）
・ その一例として、あーすフェスタかながわの活用が考えられるが、地域への展開という点では難しい。

（ハリロバ ナタリア 委員）
・ 今年のあーすフェスタかながわに、ウクライナ避難民は参加するのか。

（柳 晴実 委員長）
・ まだ分からない。各企画の詳細はこれから検討する。
・ 三つ目の提言案について、追記する点などはあるか。

（ハリロバ ナタリア 委員）
・ 特にない。

（柳 晴実 委員長）
・ 提言案の文章を詰めないといけない。役割分担をどうするか。

（金 愛蓮 委員）
・ 一度まとめる役割をしたので、他の人の方がよいかもしれない。

（柳 晴実 委員長）
・ 私の方で金委員がまとめてくれたものを引き継いで修正する。参考になる資料があれば提供してほしい。

4　全体会議

・　部会別協議の内容について、各部会長から報告した。

（事務局）

・　次回の会議日程や、修正した資料の提出期限は、改めて連絡する。

（柳　晴実 委員長）

・　委員各位で、提言の検討に参考になる資料があれば、随時共有していただけるとありがたい。

・　あーすフェスタについて、私は企画委員会のフォーラム部会に籍を置いている。フォーラム部会で、県民会議が提出する提言の内容を発表できたらよいという話や、高齢者が集まる場が作れないかといった話はしている。

・　あーすフェスタの性格上、フォーラム部会の企画は、部会の中で議論して作っていく形になる。私から県民会議としてこういう企画をやりたいと提案したとしても、フォーラム部会の人たちの意見も盛り込まれた形でイベントづくりをすることになってくるため、そのことは伝えておきたい。

・　来週18日に、次回の企画委員会がある。そこでは、細かい企画内容ではなく、フォーラム部会としてどういうことを参加者に伝えていくかというベースを話し合うことになっている。

・　フォーラム部会の人たちは、それぞれ多文化共生や国際理解にはこういうことが大事だという意見があるので、今回の部会ではこういう部分を伝えていけるようにイベントを作っていこうということを話し合う予定である。そこに参加しながら、今日の話も含めて、意見を出していきたいと思う。

・　次世代・教育部会でもあーすフェスタの企画に関する話が出ていたようなので、それについて話していけたらよいと思っている。

・　企画委員会は月１回夜の会議があるが、今からでも間に合うので、誰かに参加してもらえたら嬉しいので、よろしくお願いしたい。

・　具体的な企画については、18日の話し合いの後になると思うので、内容については、その際に提案できるように準備を進めていきたい。

（以上）